

第一声

山田真砂年

日照雨過ぎ島に匂へる葛の花
眼つむりて顎ちよとあげて銀木犀
虫の音のコツプあふるるやうにかな
鼻先をぶんと過ぎりて鬼やんま
秋風の運河を吹けば真つ直ぐに
月光の野面や背高泡立草
コロナ癒えず月の桂に風ぞうぞう
外套の襟立てナフタリン匂ふ
返り花一人の時に気づきけり
星辰の滲んでゆけり大旦
曙は海より來たり注連飾
鶏日の第一声をはぎれよく